



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	WWOOF activities in Japan : Potential for edifying and non-monetary tourism [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	BURNS, Glenn Robert
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(農学)
Dissertation Number	甲第12431号
Issue Date	2016-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/63764
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Glenn_Robert_Burns_review.pdf, 審査の要旨



学 位 論 文 審 査 の 要 旨

博士の専攻分野の名称 博 士 (農学)

氏名 Glenn Robert Burns

審査担当者	主 査	教 授	近 藤 巧
	副 査	教 授	山 本 康 貴
	副 査	准教授	合 崎 英 男
	副 査	講 師	澤 内 大 輔

学 位 論 文 題 名

WWOOF activities in Japan: Potential for edifying and non-monetary tourism
(日本のWWOOF活動:啓発的・非貨幣的ツーリズムのポテンシャル)

本論文は英文157頁、表28、6章からなり、参考論文1編が付されている。

ツーリズムは財・サービスの需要の拡大を通じて地域経済の活性化に寄与する。その一方で、観光地での自然が損なわれるなど様々な弊害も生じている。そのため、コンベンショナル・ツーリズムに代わりエコ・ツーリズム、グリーン・ツーリズムなどオルタナティブなツーリズムが提唱されてきた。本研究の対象であるWWOOF (World Wide Opportunities on Organic Farms) は、観光のみならず、ボランティア、学び、新たなライフスタイルの追求など従来のマス・ツーリズムには欠如していたオルタナティブな要素を兼ね備えている。また、WWOOFの最大の特徴はHostとゲストのサービスの交換過程を貨幣に依存しないという点にある。

わが国では、2002年にWWOOF組織が設立されて以降、WWOOFへの参加者は急速な伸びを示している。WWOOFに関する研究の大半はその活動が活発なオーストラリア、ニュージーランド、米国を対象とし、日本のWWOOFに関する研究は皆無に等しい。そこで、本論文では、日本のWWOOF活動の実態や参加者の特徴を明らかにすることを課題としている。

第1章と第2章では、WWOOFの理念と歴史、運営の仕組みを明らかにしている。WWOOFは農村、自然、有機農産物へのアクセスを目的とする1971年に形成されたイギリスの市民グループをその起源とする。当初、WWOOFとは‘Weekend Workers on Organic Farms’を意味していたが、‘Willing Workers on Organic Farms’を経て‘World Wide Opportunities on Organic Farms’へと変貌している。現在ではWWOOF活動はアグリ・ツーリズムに類似する特徴を有するが、人々が自活すること、有機農産物を消費すること、「土に帰る」という社会運動的側面を強く保持している。

WWOOFは大きく2つの経済主体、すなわち、HostとゲストないしはWwooferからなり、両者は互恵関係にある。Hostは有機農業などを営みWwooferに宿泊と食事サービスを提供する。それに対して、Wwooferはボランティアとして援農、語学教育や音楽教育などを通してHostや地元住民との交流を図る。Wwooferはインターネット上でWWOOF組織に登録されているHostの中から興味を持ったHostを選び、ボランティア活動や交流条件、滞在期間などをHostと直接交渉する。WwooferとHostの交流内容はすべて両者の自由な選択と交渉に委ねられている。

第3章では、日本のWWOOFに登録されているWwooferの特徴や活動内容について分析している。データは主として2015年に実施したオンライン調査である。2002年から2014年にかけて、25,133人のWwooferが登録されている。その年齢構成を見ると安価な世界旅行のニーズが高いと考えられる20代が60%を占めていた。また、子供から

60歳以上の高齢者まで広く分布していた。国籍は日本人が32%、外国人が68%であった。性別では女性割合が高く60%を占めていた。Wwooferの職業は芸術家、教師、自営業者、フリーランスなど多様性に富み、63%は都会に住んでいる。

交流内容は、農業や食、自給的ライフスタイル、自然と環境に関することなど多種多様であった。また、Wwooferの滞在期間は平均で1週間から1ヶ月であるが、中には4ヶ月以上の滞在者も見られた。WWOOFへの加入は容易で、回答者の77%がWWOOFに参加して高い満足感を示していた。Wwooferの動機として安価な海外旅行が考えられるが、貨幣を媒介としない自由な学び、多様な経験の蓄積、Hostや地方のコミュニティとの交流などを重視するWwooferも見られ、WWOOFは農村と都市との交流に寄与していると考えられた。

第4章では、日本のWWOOFに登録されているHostの特徴について分析している。2002年から2013 年にかけてアクティブなHostの数は20人から425人に増加している。北海道から沖縄まで全ての都道府県にHostが存在する。自然と農業に恵まれた北海道には最も多くのHostが存在し、全体の16%を占めていた。Hostが農家の場合、その多くは部分的ではあるが有機農業に携わり、1ha以下の規模が過半数を占めている。Hostの活動で比較的構成比が高かったのは、農業、農産加工、芸術文化、アウトドア活動であった。WWOOF活動の理念に共感し様々なWwooferと交流できる人材、Wwooferが宿泊できる広いスペースに恵まれていることがHost存立の基本的条件であった。

第5章では、WWOOFの国際組織について分析している。現在、50ヵ国でWWOOF組織が設立され、それぞれの組織は独立して運営されている。日本のWWOOF組織と外国の組織との違いは、日本ではWWOOF代表がHostとの連絡を密にして、HostとWwooferが良好な関係を構築できるように協力していることであった。

以上、WWOOF活動は、国籍、年齢、言語、職業において様々な背景を有する人々の交流の受け皿を提供し一定の成果を上げている。本研究は、このような非貨幣的・啓発的ツーリズムによる農村社会の発展の可能性やその社会的意義を明らかにしている点で高く評価できる。以上の成果は、農村社会の活性化やボランティア・ツーリズムなど新たなツーリズムの研究に大きく貢献するものである。

よって審査員一同は、Glenn Robert Burns氏が博士(農学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認めた。